



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第10回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

民衆が勝ったんです

あけましておめでとうございます。わたしたちの国と社会が、教会が、わたしたち一人一人が、み心になつた歩みを続ける一年となりますように。

「民衆が勝ったんです」——これは誰の言葉でしょうか。いえいえ、選挙後の小泉首相の言葉ではありません。ニーチェの言葉です。より正確には、ニーチェが自分に向かって異を唱える民主主義者の言葉として書きつけた言葉です。新年早々からニーチェなんて、わ

たしも少し気が引けるのですが、ここには意外と希望に満ちたメッセージが読み取れるように思っています。

ニーチェといえば、「神は死んだ」という宣言とともに、徹底したニヒリズムを要求した哲学者です。彼にとつてキリスト教は、怨恨（ルサンチマン）のかたまりでありました。高貴なものや強いものに反対する、弱者の転倒した道徳です。たとえば、「赦し」なんて、欺瞞の最たるものです。本当は心の中に憎しみや恨みつらみが沸き返っているのに、それを押し殺して口では「赦します」などと言うからです。

「敵を愛する」って、そもそも愛するなら「敵」とは言わないじゃないか。本当に赦すなら、きれいさっぱり忘れてしまはずで、その時にはもはや「赦す」ことすらできなくなっているはずだ。こういうキリスト教の欺瞞から、平和だの平等だの民主主義だのとい

う「賈の理想」がつくり出され、それがヨーロッパの頽廃を招いたのだ……。

ニーチェはそう語って当時のキリスト教を批判しました。けれども、興味深いことに、彼はそういう自分の考えに、世界の歴史が異を唱えるだろう、ということも知っていたようなのです。それが、冒頭の言葉です。

「あなたはまだ何をほざいているのですか。事実に従いましょや。民衆が勝ったんです。奴隷と言ってもいいですし、賤民とか群畜とか、あなたのお好きな言葉で結構ですけれど、ユダヤ人がそれをやったというのなら、それでいいじゃありませんか。……平民の道徳が勝ったわけですよ。……何もかも目に見えてユダヤ化し、キリスト教化し、賤民化していています」（秋山英夫・浅井真男訳『道徳の系譜』、白水社）

これは、ニーチェ自身の言葉です。高貴な道徳への回帰を求める自分の哲学に、きつと

キリスト教やそこから生い出た民主主義は、たしかに欺瞞に満ちているかもしれない。愛や赦しは、覆面をした憎しみにすぎないかもしれない。でもいいじゃないですか。

それが続いてゆけば、やがて本物に変わってゆくこともあるでしょう。歴史の曖昧さに耐えることができれば、それが習性となり、第二の本性となります。

民主主義者はこう反論するだろう、と書いています。ニーチェ先生に向かって、「事実に従いましょや」と畳みかけるのは、いかにも野卑な物言いですね。でも、何と言われようと、それでも世界の大勢がそちらに向かっていることは確かなのです。十九世紀末のヨーロッパだけではなく、やがて自分の言ったことも理解してもらえらるだろう、と彼が予測したその二〇〇〇年を過ぎても、やっぱり民主主義は確実に進んでいます。

わたしたちの国の憲法も、その一端です。第九七条には、この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」である、と述べられています。戦後民主主義の浅薄さやうそ臭さに対

は尊いものだということを、男も女も実感しているのです。

もう一度言います。

キリスト教やそこから生い出た民主主義は、たしかに欺瞞に満ちているかもしれませんが。愛や赦しは、覆面をした憎しみにすぎないかもしれない。だが、人間の心にあまり純粹さばかりを求めるのも考えものです。いいじゃないですか。偽物でもいい。嘘でもいい。それが続いてゆけば、やがて本物に変わってゆくこともあるでしょう。「嘘から出たまこと」がきつとあります。歴史の曖昧さに耐えることができれば、それが習性となり、第二の本性となります。

人間は、自己の本性の虜ではありません。どんなに頑なな人でも、変わることができます。固く乾いた土のような心も、潤い暖められて動くことがあります。人間は、所与の環境に規定されるだけではありません。みずから越え出てゆく能力が与えられています。だからそういう人間の作る社会も、体制の呪縛をみずから破り出ることがあるのです。ソ連と東欧の共産主義体制が、七〇年で終わりを告げたように。

長い苦労と闘いがあるにしても、トンネルの出口はかならずあります。それを何と呼ぼうと、あなたの勝手です。でも、ニーチェ先生、やっぱり民衆が勝ったんです……。

する批判は、きつといろいろあるでしょう。でも、「民衆が勝ったんです」。その成果は、前進することはあっても、後戻りすることはありません。

イラクでは、十月に国民投票が行われ、多くの男女が投票して新憲法が承認されました。十二月には国民議会選挙も行われ、新政府が誕生します。

たしかに、その過程には強引なところや不正なところもあるでしょう。それでも、「民衆が勝ったんです」。どんなにアメリカが嫌いでも、どんなに以前は治安がよかったと嘆いても、独裁者のもとの窮屈な生活に戻りたいという人は誰もいません。脅されても妨害されても、自分で一票を投ずるという自由